

2026年2月1日 ガラテヤ2：11-21

説教題 「わたしのためにご自身をささげられた神の御子」

【今日の説教から】

「わたしが現に走っており、またすでに走ってきたことが、むだにならないため」、「わたしたちは、福音の真理があなたがたのもとに常にとどまっているように、瞬時も彼らの強要に屈服しなかった」。

パウロは福音の真理を巡って戦っていました。もはや二度と人をとりこにする「むなしいだましごとの哲学」(コロサイ2：8)に捉えられることがないように、「人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によつて進み続けました。彼は「わたしが切実な思いで待ち望むことは…大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられること…わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益」(ピリピ1：20-21)と言い、天で安息を得るまでは命がけで、死に物狂いでただキリストによって生き、キリストを現すことを願っていました。

「福音の真理に従ってまっすぐに歩」くということにおいて彼は妥協せず、彼は大先輩であるペテロに対しても、全く恐れることなく面と向かって反対し、抵抗しました。それは福音の真理に従って進み、とどまり続けることが生命線だとつくづく知っていたからです。「人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、…わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰による」キリストの贖いの死による「神の恵み」に感謝します。

皆様おはようございます。寒い寒い1週間でしたが、お元気にお過ごしでしたでしょうか。2月に入りました。木っと冬の寒さも折り返し地点で、寒さの頂点は過ぎて、春に向かって少しづつ暖かくなる区間に入ったものと思います。今週寒さは少し緩むそうですね。引き続きどうぞご自愛ください。

ガラテヤ書2章の後半部分です。1章にはこのように書いてありました。

「わたしが現に走っており、またすでに走ってきたことが、むだにならないため」、「わたしたちは、福音の真理があなたがたのもとに常にとどまっているように、瞬時も彼らの強要に屈服しなかった」。

パウロは福音の真理を巡って戦っていました。もはや二度と人をとりこにする「むなしいだましごとの哲学」(コロサイ2：8)に捉えられることがないように、「人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によつて進み続けました。彼は「わたしが切実な思いで待ち望むことは…大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられること…わたしにとっては、生きることはキリスト

であり、死ぬことは益」(ピリピ 1: 20-21)と言い、天で安息を得るまでは命がけで、死に物狂いでただキリストによって生き、キリストを現すことを願っていました。

「福音の真理に従ってまっすぐに歩くということにおいて彼は妥協せず、彼は大先輩であるペテロに対しても、全く恐れることなく面と向かって反対し、抵抗しました。それは福音の真理に従って進み、とどまり続けることが生命線だとつくづく知っていたからです。

2:11 ところが、ケパがアンテオケにきたとき、彼に非難すべきことがあったので、わたしは面とむかって彼をなじった。

2:12 というのは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、彼は異邦人と食を共にしていなかったのに、彼らがきてからは、割礼の者どもを恐れ、しだいに身を引いて離れて行ったからである。

2:13 そして、ほかのユダヤ人たちも彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれた。

2:14 彼らが福音の真理に従ってまっすぐに歩いていないのを見て、わたしは衆人の面前でケパに言った、「あなたは、ユダヤ人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしいむのか」。

主の兄弟ヤコブはエルサレムの教会を指導していたとの伝承がありますが、エルサレムの教会では未だ律法をキリストの福音よりも重んじる有力者がいたと思われます。

ユダヤ人たちは割礼を受けない異邦人たちの家に入ることも食事を共にすることもしませんでした。そしてキリストの福音を信じた後も、教会の主だった人たちが、割礼を受けることによって救われるのではなくてキリストの十字架に贖いによって救われると熟知しているはずの人たちが「割礼の者どもを恐れ、しだいに身を引いて離れて行」き、「そして、ほかのユダヤ人たちも彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれた」という行動をしたときに、「もしもある人が、あなたがたの受けいれた福音に反することを宣べ伝えているなら、その人はのろわるべきである。今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい」と言い、「福音の真理があなたがたのもとに常にとどまっているように、瞬時も彼らの強要に屈服しなかった」というパウロは断固として反対したのです。

「あなたは、ユダヤ人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしいむのか」。

これは痛烈な語り方です。パウロはユダヤ人としての生き方を全うしようと願い、「同国人

の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった」のです。そういう身の上から彼は自分を高くして、ペテロのユダヤ人としての生き方を否定しているのでしょうか。いえいえ、パウロはかつての自分自身を強烈に批判しているのです。これはパウロによるかつての彼自身への批判の言葉でもあります。

「あなたは、ユダヤ人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人になることをしいるのか」。

「同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった…1:15 ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、16 異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった」

この「ところが」という主イエス様のお働きかけにより彼の生き方は一変したのです。「母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった」のです。

母の胎内にある時からイエス様の啓示によって生きるように、生き生きた神様からのキリスト・イエスの啓示によって生きるようにと召されていたのに、以前の彼の歩みはそれと正反対のものでした。これが人の罪の性質です。人は母の胎の中に私たちを作り上げられる唯一の方、天地万物をお造りになられ、私たちをお造りになった方に反抗して、正反対の反抗の歩みをする罪にある存在なのです。

本来のユダヤ人の歩みであれば創造者である神様の御心に即して生きるべきであったのにそれをしない者、それはすなわちユダヤ人たちが神を神とせずに軽蔑していた異邦人たちと本質的に等しいということなのです。そういう義のない者たちが、義の行いをすることも出来ない分際で、律法を守ってもいない人が守ることを強制するということはいかにも偽善で本末転倒なのではないか、それがパウロの語ることです。ここには大切な真理があります。自分を過大評価してはならないということです。神様の目から自分がどう映っているかを冷静に見る姿勢が大切です。

ヨハネ 18:28 それから人々は、イエスをカヤバのところから官邸につれて行った。時は夜明けであった。彼らは、けがれを受けないで過越の食事ができるように、官邸にはいらなかつた。

使徒 10:9 翌日、この三人が旅をつづけて町の近くにきたころ、ペテロは祈をするため屋上

にのぼった。時は昼の十二時ごろであった。

10:10 彼は空腹をおぼえて、何か食べたいと思った。そして、人々が食事の用意をしている間に、夢心地になった。

10:11 すると、天が開け、大きな布のような入れ物が、四すみをつるされて、地上に降りて来るのを見た。

10:12 その中には、地上の四つ足や這うもの、また空の鳥など、各種の生きものがはいつていた。

10:13 そして声が彼に聞えてきた、「ペテロよ。立って、それらをほふって食べなさい」。

10:14 ペテロは言った、「主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何一つ食べたことがありません」。

10:15 すると、声が二度目にかかってきた、「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない」。

10:16 こんなことが三度もあってから、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。

10:17 ペテロが、いま見た幻はなんの事だろうかと、ひとり思案にくれていると、ちょうどその時、コルネリオから送られた人たちが、シモンの家を尋ね当てて、その門口に立っていた。

10:18 そして声をかけて、「ペテロと呼ばれるシモンというかたが、こちらにお泊まりではございませんか」と尋ねた。

10:19 ペテロはなおも幻について、思いめぐらしていると、御靈が言った、「ごらんなさい、三人の人たちが、あなたを尋ねてきている」。

10:20 さあ、立って下に降り、ためらわないで、彼らと一緒に出かけるがよい。わたしが彼らをよこしたのである」。

10:21 そこでペテロは、その人たちのところに降りて行って言った、「わたしをお尋ねのペテロです。どんなご用でおいでになったのですか」。

10:22 彼らは答えた、「正しい人で、神を敬い、ユダヤの全国民に好感を持たれている百卒長コルネリオが、あなたを家に招いてお話を伺うようにとのお告げを、聖なる御使から受けましたので、参りました」。

10:23 そこで、ペテロは、彼らを迎えて泊まらせた。翌日、ペテロは立って、彼らと連れだって出発した。ヨッパの兄弟たち数人も一緒に行った。

10:24 その次の日に、一行はカイザリヤに着いた。コルネリオは親族や親しい友人たちを呼び集めて、待っていた。

10:25 ペテロがいよいよ到着すると、コルネリオは出迎えて、彼の足もとにひれ伏して拝した。

10:26 するとペテロは、彼を引き起して言った、「お立ちなさい。わたしも同じ人間です」。

10:27 それから共に話しながら、へやにはいって行くと、そこには、すでに大ぜいの人が集まっていた。

10:28 ペテロは彼らに言った、「あなたがたが知っているとおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすることは、禁じられています。ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました。

10:29 お招きにあずかった時、少しもためらわずに参ったのは、そのためなのです。そこで伺いますが、どういうわけで、わたしを招いてくださったのですか」。

10:30 これに対してコルネリオが答えた、「四日前、ちょうどこの時刻に、わたしが自宅で午後三時の祈をしていましたと、突然、輝いた衣を着た人が、前に立って申しました、

10:31 『コルネリオよ、あなたの祈は聞きいれられ、あなたの施しは神のみ前におぼえられている。

10:32 そこでヨッパに人を送ってペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。その人は皮なめしシモンの海沿いの家に泊まっている』。

10:33 それで、早速あなたをお呼びしたのです。ようこそおいで下さいました。今わたしたちは、主があなたにお告げになったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ているのです」。

10:34 そこでペテロは口を開いて言った、「神は人をかたよりみないかたで、

10:35 神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さることが、ほんとうによくわかつてきました。

2:15 わたしたちは生れながらのユダヤ人であって、異邦人なる罪人ではないが、

2:16 人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。

これも言い切った表現だと思います。パウロはこう言います。

1:13 ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。

1:14 そして、同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。

1:15 ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、 1:16 異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった…

1:11 兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言っておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間に よるものではない。

1:12 わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。

ピリピ 1:20 そこで、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしが、どんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである。

1:21 わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。

律法、律法、律法と、寝ても覚めても人一倍熱心に考えていた彼が失敗したのです。彼はそれ以降、徹底的にただ神様の御に向き合い、主の啓示による導きがなければ一歩も進まないと心に定めたのです。もう彼はキリスト抜きで生きることなど出来なくなってしまったのです。

2:17 しかし、キリストにあって義とされることを求めるこことによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。

これは面白い表現であり、分かりにくい言葉でもあります。

「キリストにあって義とされることを求めるこことによって、わたしたち自身が罪人であるとされる」というのはどういうことでしょうか。どうしてキリストにあって義とされることを求めることが私たちが罪人とされることなのでしょうか。そしてキリストが私たちの罪の仕立て人になるというのでしょうか。

それはこういうことです。パウロはかつては律法を落ち度なく守り、ユダヤ人としても自分は義人であり罪人ではないという確信を持っていたが、キリストにあっては自分が律法を守り得ない弱い者、罪人であるということを嫌というほど知らされるようになり、それはその様子を客観的に見れば、キリストがあたかも罪なき者、力強く立っていた者を弱くさせて罪人になるべく陥れたかのように見えるかもしれないということではないでしょうか。

ここには大切な真理があります。自分を過大評価してはならないということです。神様の目から自分がどう映っているかを冷静に見る姿勢が大切です。私たちは律法を成し得ない存在なのです。それを成していると思っていたのが幻惑だったのです。ですからそのことを知らされて力を落として私たちが罪人であると気付いたということは、至極当然な気付くべきことだったのです。私たちは強くも立派でもない。弱く罪人である。こんなことを聞かされたら、そんな話は聞きたくないものだと思います。しかしそういう話を聞かなければならないのです。そこが出発点なのです。その最も低いところから神様は私たちを引き上げてくださると、主はそうおっしゃるのです。私たちが救いに釣り合う立派な存在でなければなら

ないというお話は作り話だったのです。

ローマ

5:1 このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。

5:2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。

5:3 それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、

5:4 忍耐は鍊達を生み出し、鍊達は希望を生み出すことを、知っているからである。

5:5 そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。

5:6 わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。

5:7 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。

5:8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。

2:18 もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるとすれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。

2:19 わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。

2:20 生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

2:21 わたしは、神の恵みを無にはしない。もし、義が律法によって得られるとすれば、キリストの死はむだであったことになる。

ここには「死」があります。不連続があるので。罪人である私たちのみの上、破綻するばかりの滅びの中にある身の上を認めて、神様にその死んだ状態から救ってくださいと願うのです。そしてそういう、神様の御心を成し得ない、むしろ正反対のことを志す罪の性質に死に、その生き方にピリオドを打っていただき、新たに生きるいのちに生かされる、その生き方に導き入れられるのです。これが私たちの新生です。

ヨハネ 3:3 イエスは答えて言われた、「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」。

3:4 ニコデモは言った、「人は年をとつてから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいって生れることができましょうか」。

3:5 イエスは答えられた、「よくよくあなたに言っておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」。

3:6 肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。

3:7 あなたがたは新しく生れなければならぬと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。

3:8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである」。

私たちを生かしてくださる主に感謝いたしましょう。キリストの死にどんなに深い意味があったのかを思い、それは死の状態にいた私を共に生かすためであることを重い感謝しましょう。そして、私たちを生かすために死なれた方のためにこの新たな命を用いましょう。

2:20 生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。福音の真理、それは人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされるということ、そしてそれは「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰」によるという教えをありがとうございます。あらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によつて祈ります。アーメン